

『十地経』における十地の構造

-各地の結語部分を手がかりとして-

平賀 由美子

はじめに

本経は十の菩薩地において、衆生済度の菩提心を発し「決定された(*suvinīścita*)誓願」をもつ菩薩に諸仏の智慧が生成していく階梯を説くものであり、それは言うまでもなく、仏の自内証の境界であることを前提とする。その「菩薩に諸仏の智慧が生成する」ことが具体的に説かれるのは、第八地以降の無功用(*anābhoga*)なる境界においてであり、それは菩薩が加持なる行為を行うことと連動し、各地の「結語部分」からもその境界の転換が明確に説示される。そこで本論では『十地経』の十地それぞれ各地の終わりに同じ文章が繰り返される「結語部分」(『十地経論』でいう調柔果、摂報果、願智果に相当する箇所)をとりあげ、『十地経』の十地説の構造を理解する手がかりとして検討したい。即ちこの「結語部分」において十の菩薩地の階梯全体が簡潔に示され、本経の説く十地の基本的な構造が説示されると思われる。

本経の趣旨は序章の「大乘光明(*mahāyānaprabhāsa*)」と名づけられた「菩薩の三昧(*bodhistva-samādhi*)」中において簡潔に示され¹、金剛藏菩薩がその「菩薩の三昧」から立ちあがって直ぐ、衆会の諸菩薩たちに「この菩薩の誓願は善く決定された(*suvinīścita*)ものである」と述べていることに注目される。そして「(この誓願は)法界のように広大にして虚空界を究め、未来の限りを尽くし一切の衆生

¹その「菩薩の三昧」に入った金剛藏菩薩に、十方の仏国土の諸如来たちが顕れ、同じ金剛藏という名前の諸如来たちが菩薩に加持をしているといい、そしてその動因は「世尊なるヴァイローチャナのもつ本願の不可思議な力(加持)(*bhagavato vairocānasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna*)」(如来側)と「あなた(菩薩)の殊勝なる福德と智慧(*tava ca puṇyajñānaviśeṣa*)」であると説く。それは言い換えると、釈尊がかつて釈迦菩薩であった時に端を発する、本の誓願としての加持(*pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna*)に基づいて「殊勝なる智慧(*jñānaviśeṣa*)」をもつ菩薩に十方の仏国土の諸如来たちが加持をしていると理解される。詳細は平賀(2007)p. 142-139

界を救済するものである」（DBhS 6, 8-9; R 4, 25-28）と語られる。その「願善決定」について『十地經論』では「願善決定者、如初地中説發菩提心。即此本分中願應知」とし、また「善決定者、眞實智攝故。善決定者、即是善決定。此已入初地。非信地所攝」（Br T26, 126c15-18）という。ここから初地において菩提心を發した菩薩の誓願は眞實なる如來の智慧に摂められているから決定されたものであると理解され、初地以上の境界であると知られる。続いて「諸の菩薩たちが過去・未來・現在の諸仏世尊たちの智慧地 (*jñānabhūmi*) に入るところに十の菩薩地があり、諸仏世尊の智慧地に入る」と述べ、十の菩薩地は諸仏世尊たちの智慧地に入る階梯であると理解される。そして「その十の菩薩地は過去・未來・現在の諸仏世尊たちによって、すでに説かれ、まさに説かれようとされ、また今説かれている」（DBhS 6, 9-15; R 4, 28-5, 7）といい、これについて『十地經論』では「復此十地生成佛智住持故。如經諸佛子此菩薩十地是過去未來現在諸佛已説今説當説故」（Br T26, 127a6-8）とされる。即ちこの十の菩薩地において菩薩に諸仏の智慧が生成し保持するものとなるのであり、それは三世にわたって諸仏世尊たちに説かれていると理解される。

以上から本經は諸仏世尊たちの智慧地なる十の菩薩地において、衆生濟度の菩提心を發し、決定された誓願をもつ菩薩に諸仏の智慧が生成していく階梯を説くものであり、それは三世の無量阿僧祇にわたって諸仏世尊たちによって説かれていると知られる。そしてここでいう「菩薩に諸仏の智慧が生成する」ことが本經において具体的に説かれるのは、第八地以降の無功用 (*anābhoga*) なる境界においてである。即ちそれは第七地の終わりに菩薩が「善く思忖された觀察 (*svucitavica*)」と名づけられた「菩薩の三昧 (*bodhistva-samādhi*)」に入るを契機とし、続いて第八地のはじめに「如來の加持がよく加持されている (*svadhiṣṭhitatathāgatādhiṣṭhāna*) 菩薩」となり、無量なる智慧の道に入り、「諸法本不生」という認識、即ち「無生法忍」を完全に具足し、第八地に止住する菩薩となると共に「一切の功用 (*sāboga*) を離れ、無功用 (*anābhoga*) なる法性を得る」と説くところから第八地から無功用 (*anābhoga*) なる境界であると知られ、そしてそれ以降、いわゆる「本の誓願なる加持 (*pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna*)」に基づく菩薩自らが行く加持の様相によって説示されるのである。

その菩薩自らが行く「加持」とはサンスクリット語で *adhiṣṭhāna* といい、その語は本經における重要な術語の一つである。その動詞形 *adhi√sthā* は序章と八地以降に限って見られ、序章においてはその行為主体が諸如來たちであるのに対し、

第八地以降は菩薩に代わることが注目される。「加持」なる行為は本来、諸如来たちのみ為し得る行為であり、この第八地以降において加持をする行為主体が諸如来たちでなく、菩薩に転換することは本經の思想理解に欠かせないものである。十地説の構造を検討する際、従来から議論されている結節点の問題、即ち無功用(*anābhoga*)なる境界に入るのは第七地なのか第八地なのかという問題があるが、以上の通り、本經の本文からは第八地以降を無功用と理解してよいと思われ、各地の結語部分からも前七地を功用(*sābhoga*)、第八地以降を無功用(*anābhoga*)と捉えることができる²。

本論では結語箇所とその境界に明確な相違があると認められる、前七地と第八地以降の叙述内容に注意しつつ、以下(1)～(4)にあげる結語箇所の用例を手がかりとしながら、本經の十地説はいかなる構造となっているのか、検討してみたい。

(1) 調柔という果の利益の殊勝 - 菩薩の信等の善根が調えられる果 -

『十地經』の結語部分は『十地經論』においては「果利益校量勝³」に相当し、即ち(菩薩地を修した)結果の殊勝を説く内容と理解される。そしてその「果」を四分し、(a)調柔果⁴(b)發趣果⁵(c)攝報果⁶(d)願智果⁷として注釈される。

²本經では第七地において、前六地までに具足した六波羅蜜と方便・願・力・智を加えた十波羅蜜、更には一切の菩提分法(四摂法、四加持、三十七菩提分法、三解脱門)が刹那ごとに完成されると説く。その理由として初地より第七地に至るまでに菩薩が実現した智慧を実現する徳目は、第八地より始めて、完全な究極に至るまで無功用(*anābhoga*)なる状態において実現されるという。即ち第七地に止住し、一切の菩提分法を等しく起こし、一切の菩提分法が刹那ごとに完成されるに至った菩薩は、止と観とを觀じ、第八地以降の法流へ入るべく「善く思忖された觀察(*suviṇṇa*)」と名づけられた「菩薩の三昧(*bodhi-sattva-samādhi*)」に入る(*saṃ-ā-√pad*)のである。それは初地以降、順次各々の菩薩地の徳目を修する為に菩薩地に向かって進むことが無くなる状態であり、序章において示された「法体の三昧」の境界へいよいよ金剛藏菩薩が入ることを意味する。つまりその「菩薩の三昧」に金剛藏菩薩が入ることを契機として、金剛藏菩薩は「無功用(*anābhoga*)」なる精神状態に入ると理解される。その「無功用(*anābhoga*)」とは $\sqrt{\text{bhu}}$ (享受する)から派生する名詞の否定であるから、菩薩自らが何かに向かって($\bar{a}$ -)享受しようとする行為をしなくなる(*an*)ことを示し、自然(じねん)・任運なる状態である(反対に「功用(*sābhoga*)」はその何かに向かう($\bar{a}$ -)行為のある(*sa*)状態である)以上の小生の見解は平賀(2010)にまとめているので併せて参照されたい。

³論曰。果利益校量勝有四種。一調柔果利益勝。二發趣果利益勝。三攝報果利益勝。四願智果利益勝(Br T26, 143c5-7)

⁴布施・回向・衆生教化等によって、よく信等を調える故、及び信等の十行は布施等によって垢染を離れて清浄である故に「調柔果」という。

⁵十地(各々の)地を満足し終え、更に明らかな解説を集め、よくこの地を出発して次の地に趣向する故に「發趣果」という。

そしてその「果利益校量勝」は初地においては「校量勝分」に科分され、「次説校量勝分。云何校量勝。菩薩住此地中、勝聲聞辟支佛故。校量勝有三種。一願勝。二修行勝。三果利益勝」（Br T26, 138a29）とある。そこでは菩薩が初地に住し、声聞・辟支仏より勝れている理由について三種あげている。そのうち、一の願勝とは、本經で説く「十大願」のことであり、菩薩行を起こす方便であるとし、二の修行勝はその「十大願」に基づく正行、そして三の果利益勝はこれらの行修の具足円満した結果を説くもので、本論が問題とする「結語部分」はこれに相当する。またこのように「校量勝分」が三種にわたって説かれるのは初地のみであり、第二地以降は各地それぞれの菩薩行の内容等が説かれた後、三の「果利益勝」のみ「果利益校量勝」として「結語部分」が置かれる形となっている。

以上の「果利益校量勝」中の最初にある「調柔果」では菩薩の信等の善根が調えられる果と把握されるが、それは如何なる経緯（因）によるものなのか、初地で説く「校量勝分」中の「願勝」と「修行勝」から見てみることにし、まず「願勝」に相当する「十大願」について、本經では次のように説いている。

DBhS 19, 3-7 (MsA 8a; MsB mis; R 14, 10-17)

so syāṃ pramuditāyāṃ bodhisattvabhūmau sthitaḥ sann imāny evaṃrūpāṇi mahāpranidhānāni mahāvyaśāyān mahābhīrīrharān abhīrīrharati / yad utā śaṣaṇiḥśeṣānavaśeṣasarvabuddhapūjopasthāpanāya [/] sarvākāravaroṣetam udāradhimuktiviśuddham dharmadhātuvipulam ākāśadhātuparyavasānam aparānātakotīniṣṭham sarvakalpasamkhyābuddhotpādasamkhyāpratiprasrabdham [/] mahāpūjopasthānāya [/] prathamam mahāpranidhānam abhīrīrharati /

（試訳）彼はこの歓喜なる菩薩地に住するや否や、直ちにこれらのこのような大いなる誓願と大いなる決心と大いなる出離とを実現する。即ち、余すことなきあらゆるすべての仏を供養し恭敬せんがために、すべての勝れた相を具え、勝れた確信に浄められ、法界のように広大で、虚空界を究め、未来の限りを尽くし、すべての劫の数における仏の世に出たもう数において、大いなる供養と恭敬とを休むことはない、第一の大いなる誓願を実現する。

6 王位の身はその因に酬いて因といい、その因が成立して報いを納める故に「摂報果」という。

7 菩薩の内証の誓願の力と衆生を教化する智慧とが自在である、誓願の智慧を「願智果」という。

本経ではこの誓願は全部で十項目あり、第一の初地から各地それぞれ第十地まで、それぞれの地に修する徳目に対応した内容が織り込まれている。またその菩薩の誓願は「法界のように広大で、虚空界を究め、未来の限りを尽くし」（一切の衆生界を救済する為に）「休むことはない」と、十項目にわたって繰り返しかれる。ここに本経の誓願はいかなるものかが知られ、その誓願を地前の信地ではなく、諸仏世尊たちの智慧地である十の菩薩地で行うという決心と出離とを實現することが説かれる。

以上の誓願に基づいて行われる、十の菩薩地で行われる正行について説く「修行勝」では、本経では次のようにある。

DBhS 23, 2-7 (MsA 10b-11a; MsB mis; R 17, 15-23)

sa evam svabhinirhrtapranidhānah karmanyacitto mrducitto 'sambhāryaśraddho bhavati
 / so 'bhiśraddhadhāti tathāgatānām arhatām samyaksambuddhānām pūrvānta-
 caryābhinirhārapraveśam pāramitāsamudāgamaṃ / bhūmipariniṣpattim vaiśeṣikatām
 balapariniṣpattim vaiśāradyaparipūrim / āveṇikabuddhadharmāsaṃhāryatām / acint-
 yām buddhadharmtām / anantamadhyam tathāgataviśayābhinirhāram / aparimāṇa-
 jñānānugataṃ / tathāgatagocarānupraveśam / phalapariniṣpattim abhiśraddhadhāti /
samāsataḥ sarvabodhisattvacaryā yāvat tathāgatajgbhūmijñānanirdeśādhiṣṭhānam
abhiśraddhadhāti /

（試訳）彼はこのようにして誓願をよく実現し、努める心と柔軟な心という破られない信心がある。彼は如来・阿羅漢・正等覺者たち（なる諸仏世尊たち）が正行に証入することを信じ、波羅蜜の証得と地の達成と力の達成と無畏の円満と、不壊なる不共仏法と、不可思議な仏法と、終わりと中間とがない如来の境界の實現と、無量なる智慧に到達することと、如来の行境に証入することと（以上証）果の達成とを信受する。要するに一切の菩薩行と、ないし如来の智慧地の説示と加持とを信受するのである。

ここでは「十大願」によって、これから十地を行じていく決意を明らかにした菩薩は「努める心(karmanyacitta)」と「柔軟な心(mrducitta)」との二つの信心(śraddha)をもつことが説かれ、その「信(śraddha)」によって十の菩薩地におけ

る一切の菩薩行とその十地は諸如来たちの智慧地であり、加持がなされる地であることを信受する (*abhiśraddadhāti*) と説く。

その「努める心 (*karmaṇyacitta*)」と「柔軟な心 (*mṛducitta*)」について『十地經論』ではそれぞれ「調順心」と「柔軟心」と訳し、『仏説十地經』も「柔軟心・調柔心」 (*Śdh*) とあり、これら漢訳二本は梵語テキストに対応している。しかし蔵訳ではその二心のほか更に八つを加えられ、全部で十心とし、『八十華嚴』『六十華嚴』『十住經』はそれに対応する⁸。そしてその二心について『十地經論』では「發如是諸大願已。則得調順心者、彼諸善根中得自在勝故。柔軟心者得勝樂行故。如是則成信者、於中本行入者、從菩薩行入乃至成菩提覺故」 (Br T26, 141b26-29) といい、即ちその信心を得た菩薩は彼の善根 (に基づくはたらき) が自在となり、十の菩薩地を行じる勝行を得るのであり、このような心の実現によって十の菩薩地なる菩薩行に入り、菩提の覚りを實現すると理解される。その菩提の覚り (果) は菩薩行を因として証入するから菩薩行の中に摂められている (「本行入」) といえ、「復略説彼菩薩本行入示現」 (Br T26, 141c10-11) と説く⁹。

以上の行修 (因) の具足円満した「果」を説くものが「果利益勝」であり、これからとりあげる「結語部分」に相当する箇所である。まず最初に「調柔果」が説かれるが、その「調柔」とは先述した二心である「調順心」 (努める心 (*karmaṇyacitta*) と「柔軟心」 (柔軟な心 (*mṛducitta*)) を指すものと思われる。その「調柔果」に相当する箇所は本經の初地においては次のように述べている。

用例① DBhS 26, 2-11 (MsA 10b-11a; MsB mis; R 19, 26-20, 4)

Tasyāsyāṃ **pramuditāyāṃ** bodhisattvabhūmau sthitasya bodhisattvasya bahavo
buddhā ābhāsam āgacchanti / audārikadadarśanena praṇidhānabalena ca bahūni

⁸ 十としたのはおそらく十大願に対応させたものと考えられる。「利益心、柔軟心、隨順心、寂靜心、調伏心、寂滅心、謙下心、潤澤心、不動心、不濁心」 (*Śn*)、「利安心、柔軟心、調順心、寂靜心、不放逸心、寂滅心、直心、和潤心、不悲心、不濁心」 (*Bb*)、「利安心、柔軟心、調順心、善心、寂滅心、和潤心、直心、不亂心、不燒心、不濁心」 (*Kj*) 二心にしても十心にしても、菩薩の決意表明である「十大願」の實現に基づく信心 (*śraddha*) の確立によって、菩薩は十の菩薩地に入るということがここで理解される。

⁹ ここからも本經が「果」の説明としてその「因」である菩薩行、十の菩薩地を説いていることが知られる。

buddhaśatāni bahūni buddhasahasrāṇi bahūni buddhaśatasahasrāṇi bahūni
 buddhaniyuta¹śatasahasrāṇi bahavo buddhakoṭyo bahūni buddhakoṭīśatāni bahūni
 buddhakoṭīśahasrāṇi bahūni buddhakoṭīśatasahasrāṇi bahūni buddhakoṭīnayuta²
 śatasahasrāṇy ābhāsam āgacchanti / audārikadarśanena praṇidhānabalena ca /sa tāṃs
 tathāgatān arhataḥ samyaksambuddhān dṛṣṭva-udārādhyāśayena satkaroti guru-
 karoti mānayati pūjayati cūvarapiṇḍapātraśayanāsanāglānapratyayabhaiṣajya-
 pariṣkāraiḥ ca pratipādayati bodhisattvasukhopadhānaṃ copasaṃharati /saṃgha-
 gaṇasammānanāṃ ca karoti /tāni ca kuśalamūlāny anuttarāyāṃ samyaksambodhau
 pariṇāmayati / (1,2 R nayuta)

(試訳) この**歓喜菩薩**地に止住する菩薩には、広大な見解と誓願の力とによっ
 て多くの仏たちが現れ給う。また広大な見解と誓願の力とによって数百の仏・
 数千の仏・数百千の仏・数百千の無数の仏・数億の仏・数百億の仏・数百千億
 の仏・数百千億の無数の仏が現れ給う。彼はこれらの如来・阿羅漢・正等覺者
 たちを見奉って、**最上なる意樂**をもって恭敬し、尊重し、礼拝し、供養し、ま
 た衣服、飲食、床座、病人の必需品、医薬、用具を捧げ、また菩薩の樂具を持
 参し、また僧伽の衆へ供養を行う。そしてこれらの善根を無上正等覺へ廻向す
 るのである。

この一文は初地から第七地まで各地ほぼ同文が繰り返して説かれる。ここでは各
 地の名称、「最上なる意樂（菩提への志向）をもって¹⁰」（第四地から
 「udārādhyāśayatayā」と抽象名詞へ変化）、第七地の冒頭に「このような智を具
 えた(Tasyaivaṃ jñānasamanvāgatasya)」という一文が加えられる以外、第七地ま
 で同文である。これらを表にすると次の通りである。

初地 (DBhS 26, 2-11; R 19, 26-20, 4)	pramuditā	udārādhyāśayena
第二地 (DBhS 45, 3-11; R 29, 27-28)	vimalā	udārādhyāśayena
第三地 (DBhS 59, 8-16; R 36, 21-22)	prabhākarī	udārādhyāśayena
第四地 (DBhS 72, 10-73, 1; R 40, 26-27)	arciṣmatī	udārādhyāśayatayā
第五地 (DBhS 85, 13-86, 4; R 46, 6-7)	sudurjayā	udārādhyāśayatayā

10 「廣大増上意樂」(Śdh)、「大心深心」(Śn)、「深心」(Br, Bb, Kj)

第六地 (DBhS 104, 3-12; R 53, 30-31)	abhimukhī	udārādhyaśayatayā
第七地 (DBhS 124, 2-10; R 62, 14)	dūraṅgamā	udārādhyaśayatayā、

第四地から「*udārādhyaśayatayā*」へ変化するのは、第三地において十種の「*cittāśaya*」が起り、またそれらが浄められたことからであると思われる、また第七地の冒頭に「*Tasyaivaṃ jñānasamanvāgatasya*」の一文が加えられるのは、第八地の無功用なる境界へ移行する契機となる「善く思忖された観察 (*suvicita-vicaya*)」と名づけられた「菩薩の三昧 (*bodhisattva-samādhi*)」に金剛藏菩薩が入ったことをふまえたものであると理解される。

またここでは菩薩の信等の善根が調えられ、誓願の力によって見仏・供養・廻向がなされることが説かれている。これについて『十地經論』ではこれらの菩薩の信等の善根が調えられる様を真金が火によってその姿形が磨かれることに喩えて、三種あるとし「一功德入。供養佛僧故。二悲心入。教化衆生故。三無上果入。願迴向大菩提故」(Br T26, 143c9-10)という。即ち諸仏・僧伽を供養することによって「功德」という火に入り、衆生を教化することによって「大悲の心」という火に入り、願って大菩提に回向することによって「無上菩提」という火に入って、菩薩の「信等なる善根」という真金が調えられるという。また菩薩に無数の諸仏が現れ、これらの諸如来たち等を見奉って恭敬し、尊重し、礼拝し、供養するわけであるが、これについて「供養者有三種。一恭敬供養、謂讚歎等顯佛功德故。二尊重供養、謂禮拜等。三奉施供養、謂花香塗香末香幡蓋等。以諸菩薩上妙樂具者、是諸菩薩所有世間不供之物。具足奉施一切衆僧故」(Br T26, 143c14-a5)とし、即ち仏の功德を讃嘆する恭敬供養、礼拝等の尊重供養、そして花香・塗香・末香・幡蓋等を捧げ供え、一切の菩薩衆には最上なる意樂をもって、いわゆる世間の資具を施す奉施供養であるとされる。

本經では続いて「このように彼が諸仏世尊たちを供養する時、衆生を成熟する者となり、彼は布施と愛語とによって諸の衆生たちを成熟せしめる（省略）彼には（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若・方便・願・力・智の）十のうち、布施波羅蜜が最も殊勝である」(DBhS 26, 11-14; R 20, 4-9)と説く。つまり彼の菩薩が諸仏世尊たちを供養するという行為は、菩薩に諸の衆生たちの利他を願って教化する行為へと至らせるものであり、その成熟は初地においては布施と愛語によるという。そしてその初地に止住する菩薩は十波羅蜜中布施波羅蜜が最もすぐれていると説く。続いて本經は「彼が諸仏世尊たちを供養し、また衆生の成熟に努め、これら十の浄らかな地の法を持して止住するに従って、次第に一切智者性に廻向されたこれらの諸の善根は、さらに輝かされ、よく浄められ、そして願うがままに用に適うものとなる」(DBhS 26, 14-; R 20, 10-14)という。菩薩は諸仏

世尊たちを供養し、十の菩薩地の徳目に従って衆生を教化するに努め、いわゆる十浄地法を持し十の菩薩地の階梯を進展するに従って、その菩薩の善根は一切智性に向けられ、より輝き、さらに浄められ、菩薩の願いのままに衆生の必要性に適応するものとなっていくと理解される。その十の菩薩地の階梯は前六地はいわゆる六波羅蜜であり、初地より順次、**布施波羅蜜**（四摂法中布施・愛語）、**持戒波羅蜜**（四摂法中愛語）、**忍辱波羅蜜**（四摂法中利行）、**精進波羅蜜**（四摂法中同事）、**禅定波羅蜜**（方便と般若の観察）、**般若波羅蜜**（方便と般若と智慧の観察）が修され、第七地の**方便波羅蜜**における方便と般若と智慧の完成に至って、第八地以降は各地にあった徳目がなくなり、無功用な境界から順次、**願波羅蜜**、**力波羅蜜**、**智波羅蜜**として菩薩地の階梯を進展する。一切智性に向けられた菩薩の善根の輝きも第七地から声聞・縁覚に敗られないものとなり、第八地以降は声聞・縁覚と菩薩が止住する地より下地の菩薩に敗られないものとなると説かれる。

用例①であげた一文は第八地以降（第八地・九地・十地）は各地それぞれの境界に対応する見仏と供養が説かれ、また前七地までの「廻向」に代わるその内容は第八地以降における境界の転換を見ることが出来る。また第八地のはじめに「（菩薩の）三昧の力がよく実現されたので (*samādhibalasvabhīrḥṭatvāt*)」と説かれ、それは第七地の終わりに説く「善く思忖された観察」と名づけられた「菩薩の三昧」に菩薩が入ったことと理解される。これらは第八地以降における無功用なる境界において、菩薩の行う加持なる行為に連動し、それぞれの地において次第に明らかとなる行証の境界を簡潔に説いていると思われる。

以上、第八地以降は次の内容となっている。

第八地	DBhS 145, 7-16 (MsA 39a; MsB 44b-mis; R 72, 6-15) tatra bho jīnaputrācalāṃ bodhisattvabhūmim anuprāpto bodhisattvaḥ satatasamitam aparyan tatathā-gatadarśanāvīrahitō bhavati [/] samādhi balasvabhīrḥṭatvāt /audārika ¹ buddhadarśanapūjopasthānaṃ ca ² notsṛjati /sa ekaikasmin kalpa ekaikasmin lokadhātuprasare 'nekān buddhān anekāni buddhaśātānyanekāni buddha-sahasrāṇyanekān buddhaśatasahasrāṇyanekāni buddhaniyuta ³ śatasahasrāṇi /anekobuddhakoṭīranekāni buddha koṭīśātāni / anekāni buddhakoṭīśahasrāṇyanekāni buddhakoṭīśatasahasrāṇi /anekāni buddhakoṭīniyutaśatasahasrāṇi satkaroti gurukaroti mānayati pūjayati sarvākārapūjābhīrḥṭatvāt copasampharati /
-----	--

	tāṃś ca tathāgatān paryupāste lokadhātu vibhaktipūrvakam ca dharmālokoṣaṃhāraṃ pratīcchati /sa bhūyasyā mātrayā tathāgata dharmakośa-prāptaḥ / 'saṃhāryo bhavati lokadhātu pariṇīcchānirdeśeṣu / (1 R audārika/ 2 R om 3 R nayuta) (試訳) 貴方たち仏子たちよ、ここに不動菩薩地に至った菩薩は、三昧の力がよく実現されたので、常に絶えず無辺の如来を見奉ることを離れない者となる。広大な仏を見奉り、供養し、恭敬することを放棄しない。彼はそれぞれの劫にそれぞれの世界の中において、多くの仏・数百の仏・数千の仏・数百千の仏・数百千無数の仏・数億の仏・数百億の仏・数百千億の仏・数百千億無数の仏を恭敬し、尊重し、礼拝し、供養する。また一切の形の供養を実現することを集める。そしてこれらの如来たちに仕え、世界の差別をはじめとする、法の光明なる教授を受けとる。更に進んで、彼は如来の法蔵を得て、世界（の差別）に関する問いの提示において、（答えに）窮せざる者となる。
第九地	DBhS 165, 9-166, 1 (MsA mis; MsB 52b; R 81, 4-13) sa imāṃ sādhumatīm bodhisattvabhūmim anuprāpto bodhisattvo bhūyasyā mātrayā rātriṃ divam ananyamanasikāraprayukto bhūtvā buddhagocarānupraviṣṭas tathāgatasamavadhānaprāpto gambhīrabodhisattvavimokṣānuprāpto bhavati /sa evaṃ-jñānānugato bodhisattvaḥ samahitas tathāgatadarśanaṃ na vijahāti /ekaikasmimś ca kalpe 'nekān buddhān anekāni buddhaśatānyanekāni buddhasahasrāṇyanekāni buddhaśatasahasrāṇy anekāni buddhaniyuta¹śatasahasrāṇyanekāḥ buddhakoṭīranekāni buddhakoṭīśatānyanekāni buddhakoṭī sahasrāṇyanekāni buddhakoṭīśatasahasrāṇy anekāni buddhakoṭīniyuta¹śatasahasrāṇi dṛṣṭvā ca satkaroti gurukaroti mānayatī pūjayatī / audārikeṇa buddhadarśanena pūjopasthānaṃ notsṛjati /tāṃś ca tathāgatān praśnān pariṇīcchati /sa dharmadhāraṇīnirdeśa-bhinirjāto bhavati / (1 R nayuta) (試訳) この善慧菩薩地を得た菩薩は、更に進んで、昼夜共に他の作意を勤めることなく、仏の境界に入り、如来への親近を得て、甚深なる菩薩の解脱を得た者となる。このような智慧を具えた彼の菩薩は、三昧に入って、如来を見奉ることを止めない。またそれぞれの劫において、多くの仏・数百の仏・数千の仏・数百千の仏・数百千無数の仏・数億の仏・数百億の仏・数百千億の仏・数百千億無数の仏を見奉り、恭敬し、尊重し、礼拝し、供養する。諸仏を広く見奉り、供養と恭敬とを放棄しない。そしてこれらの如来たちに諸の疑問を尋ね、法の陀羅尼を説くことによって、出生する。

第十地	DBhS 197, 12-198, 2 (MsA 51b; MsB mis; R 94, 2-9) iti hi bho jinaputraiva- mjñānānugato bodhisattvas tathāgatādvayakāyavākcitto bodhisattvasamādhi- balaṃ ca notsṛjati / buddhadarśanapūjopasthānaṃ ca karoti /sa ekaikasmin kalpe 'paryantāṃs tathāgatān sarvākārābhinirhārapūjābhiḥ pūjayati / audāri- kānugatayā pūjayā teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatām adhiṣṭhānāvabhāsaṃ sam- pratīcchati /sa bhūyasyā mātrayāsaṃhāryo bhavati [/] dharmadhātu vibhakti- paripṛcchqnirdeśaiḥ /anekān kalpān anekāni kalpaśatāni / anekāni kalpasaha- srāṇyanekāni kalpaśatasahasrāṇyanekāni kalpakoṭīniyuta¹śatasahasrāṇyanekāḥ kalpakoṭīḥ / anekāni kalpakoṭīśatānyanekāni kalpakoṭīśahasrāṇyanekāni kalpa- koṭīśatasahasrāṇyanekāni kalpakoṭīniyuta¹śatasahasrāṇi /(1 R nayuta) (試訳) 貴 方たち仏子たちよ、このような智慧を得た菩薩は、如来と不異なる身体と言葉と 心とをもち、そして菩薩の三昧の力を放棄しない。また諸仏を見奉り、供養し恭 敬し奉る。彼は一々の劫において無辺の如来を一切種に実現した供養をもって供 養し奉る。また広大な供養によって、諸仏世尊たちの加持なる光照を蒙る。彼は 更に進んで、数劫・数劫・数千劫・数百千劫・数百千無数の劫・数億劫・数百億 劫・数百千億劫・数百千億無数の劫の間、法界を分別する問いの提示において、 (答えに) 窮することはない。
-----	--

以上の通り第八地以降、菩薩は無功用なる境界の中で加持なる行為を行いつつ
も更なる菩薩地を進んでいることが知られる。即ち第八地で菩薩は「如来の法蔵」
を得て、世界に関する問いに答えられないことはなくなり（願波羅蜜）、第九地
では「法の陀羅尼」を説くことに通達し（力波羅蜜）、そして第十地に至って菩
薩は、如来と不異なる身体と言葉と心の働きを持つものとなり、法界を解釈する
問いに答えに困ることはなくなる（智波羅蜜）と説く。

(2) 摂報という果の利益の殊勝-在家の菩薩の果-

続いて本經に説かれるのは『十地經論』では「発趣果」と科分される箇所であ
る。そこでは各地の趣意が簡潔に説かれるが、各地における同じ文章の繰り返し
はないので、その次の「摂報果」に相当する箇所に移りたい。その「摂報果」の
利益勝は二種より説かれ、「一在家果。二出家果」(Br T26, 144c19-20)とし、在

家の（菩薩の）果と出家の（菩薩の）果とに分けられる。まず在家の菩薩の果についてみてみたい。

用例② DBhS 29, 10-30, 1 (MsA 12a; MsB mis; R 21, 32-22, 11)

yo 'syām pratisṭhito bodhisattvo bhūyastvena jambūdvīpeśvaro bhavati / mahaiśvaryādhīpatyapratilabdho dharmānurakṣī kṛtī prabhuh / sattvān mahātyāgena samgrhītukuśalah¹ sattvānām mātṣaryamaśavinivṛttaye 'paryanto mahātyāgāram-bhaiḥ / yac ca kiñcit karmārabhate dānena vā priyavadyena² vārthakriyayā vā samānārthatayā vā tat sarvam avirahitaṃ buddhamanasikāraiḥ dharmamanasikāraiḥ saṃghamanasikāraiḥ bodhisattvamanasikāraiḥ bodhisattvacaryāmanasikāraiḥ pāramitā manasikāraiḥ bhūmimanasikāraiḥ balamanasikāraiḥ vaiśārdyamanasikāraiḥ āveṇika-buddhadharmamanasikāraiḥ yāvat sarvākāravaropetasarvajñajñānamanasikāraiḥ / kim iti sarvasattvānām agryo bhaveyaṃ śraṣṭho jyeṣṭho varaḥ pravara uttamo 'nuttamo nāyako vināyakaḥ parīṇāyako yāvat sarvajñajñānapratīśaraṇo³ bhaveyam⁴ / (1 R saṃgrahītukuśalah 2 R priyavadyatayā 3 R pratīśaraṇo 4 R bhaveyam iti)

（試訳）ここに安住した菩薩は、多くは全インド（閻浮提）の支配者となり、大自在力を獲得し、法を守り、賢明で大きい。大いなる捨離によって、衆生を摂受するのに巧みであり、諸の衆生たちのものおしみの汚れを滅すること（巧みであって）、極まりない。また布施や愛語や利行や同事によって如何なるはたらきをしようとも、すべて、仏の作意・法の作意・僧の作意・菩薩の作意・菩薩行の作意・波羅蜜の作意・地の作意・力の作意・無畏の作意・不共仏法の作意、乃至はあらゆる種類の勝れたものを得た一切智者の智慧の作意を離れない。何故か（と言うと）『わたしはすべての衆生の統率者となろう。最も勝れた、最も卓越した、勝れた、極めて勝れた、最高の、無上なる、指導者、御者、善導者、乃至は一切智者の智慧の拠りどころとなるだろう』（と思惟するから）

はじめに下線を引いた箇所、即ち初地より第十地まで菩薩は各地それぞれに対応した王位の身となること、また衆生を摂受し、各地における衆生を教化する内容が説かれる。ここでの「王位の身」は三界に分けられ、初地と第二地は欲界の人界中の四大州（順次、閻浮提・四州）の支配者となり、第三地から第七地までは欲界の天界中の六欲天（順次、三十三天・須夜摩天・兜率天・善化天・（他化）

自在天)の王となるという。そして第八地と第九地は色界の初禪天中の大梵天王、第十地は大自在天王となることが説かれる。つまり前七地は欲界に属し、第八地以降は色界に属していることが知られ、ここからも第八地以降が無功用なる境界であることが示されている。

「衆生摂受」については本経では前七地までいわゆる善巧方便によってなされることが説かれているが、それについて『十地経論』では「方便善巧以四攝法攝取衆生故」(Br T26, 144c26-27)とある。四摂法とは菩薩が衆生の一切を受け入れ、親愛の気持を起こさせる四つの行為であり、布施(財や法を施す)、愛語(やさしい言葉)、利行(衆生を利益する)、同事(衆生と苦楽を共にする)である。これらの四摂法に基づいて衆生を巧みに仏道へ向かわせることを前七地まで説いているといえ、第八地以降は色界に至った菩薩が無功用なる境界において各地における菩薩の行証の示現が説かれていると理解される。

以上、下線部に相当する各地の内容は次の通りである。

初地	欲界中人界 四大州・閻浮提	DBhS 29, 10-12 (MsA 12a; MsB mis; R 21, 32-22, 11) yo 'syāṃ pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena jambūdvīpeśvaro bhavati / mahaiśvaryā dhipatyapratilabdho dharmānurakṣī kṛtī prabhuh / sattvān mahātyāgena saṃgrhītukuśalaḥ ¹ sattvānām mātṣaryamalavinivṛttaye 'paryanto mahātyāgārambhāih / (1 R saṃgrahī- tukuśalaḥ) (試訳) ここに安住した菩薩は、多くは全インド(閻浮提)の支配者となり、大自在力を獲得し、法を守り、賢明で大きい。大いなる捨離によって、衆生を摂受するのに巧みであり、諸の衆生たちのものおしみの汚れを滅すること(巧みであって)、極まりない。
第二地	欲界中人界 四大州・四州	DBhS 46, 7-10 (MsA 16a; MsB 16a; R 30, 18-22) yasyāṃ pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena rājā bhavati cakravartī [/ caturdvīpādhipatir dharmādhipatyapratilabdhaḥ / saptaratna-samnvāgataḥ kṛtī prabhuh [/] sattvānām dauśīlyamala-vinivartanāya kuśalaḥ sattvān daśa ¹ kuśaleṣu karmapatheṣu pratiṣṭhāpayitum/ (1 R daśasu) (試訳) ここに安住した菩薩は、多くは四州の支配者である転輪王となり、法によって支配権を

		獲得し、七宝を具え、諸の衆生たちの悪しき習性の垢を取り除くのに巧みな力をもち、諸の衆生たちを十の善なる行為の道（十善業道）に安住させるのに巧みである。
第三地	欲界中天界 六欲天・三十三天	DBhS 61, 5-6 (MsA 20a; MsB 21a; R 37, 21-23) <i>yasyām pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena indro bhavati devarājās tridaśadhipatiḥ kṛtī prabhuḥ</i> [/] <i>sattvānām kāmārāga-vinivartanopāyopasaṃhārāya kuśalaḥ sattvān kāmapaṅkāḍ abhyuddhartum</i> ¹ / (1 DBhS <i>udvartum</i>) (試訳) ここに安住した菩薩は、多くは三十三天の支配者である帝釈天となり諸の衆生たちの欲情と貪りとを除く方便を起こすのに巧みであり諸の衆生たちを欲情の泥沼の中から巧みに救いあげることができる。
第四地	欲界中天界 六欲天・須夜摩天	DBhS 74, 1-3 (MsA 23a; MsB 24b; R 41, 23-25) <i>yasyām pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena suyāmo bhavati devarājāḥ kṛtī prabhuḥ</i> [/] <i>sattvānām satkāyadṛṣṭisamudghātāya kuśalaḥ sattvān samyakdarśane pratiṣṭhāpayitum</i> // (試訳) ここに安住する菩薩は、多くは須夜摩天王となり、諸の衆生たちの有身見を取り除くのに巧みであり諸の衆生たちを巧みに正見に安住させることができる。
第五地	欲界中天界 六欲天・兜率天	DBhS 87, 8-9 (MsA 25a; MsB 28b; R 47, 1-3) <i>yasyām pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena saṃpūṣito bhavati devarājāḥ kṛtī prabhuḥ</i> [/] <i>sattvānām sarvatīrthyāyatanavinivartanāya kuśalaḥ sattvān satyeṣu pratiṣṭhāpayitum</i> / (試訳) ここに安住した菩薩は、多くは兜率天王となり、一切の他教（外道）のところより、諸の衆生たちを引き戻すのに巧みであり、諸の衆生たちを諸の真理に巧みに安住させることができる。
第六地	欲界中天界 六欲天・善化天	DBhS 105, 11-14 (MsA 29b; MsB 33b; R 54, 21-25) <i>yasyām pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena sunirmīto bhavati devarājāḥ</i> / <i>kṛtī prabhuḥ sattvānām abhimānapratiprasrabdhaye</i> [/] <i>kuśalaḥ sattvāms tebhyo</i> ¹ 'bhīmānikadharmebhyo <i>vinivartayitum / asaṃhāryaś ca bhavati sarvaśrāvaka-paripṛcchāyām</i> / <i>kuśalaḥ sattvān pratītyasamutpāde 'vatārayitum</i> / (1 R om)

		(試訳) ここに安住する菩薩は、多くは善化天王となり、諸の衆生たちの増上慢を鎮めるのに巧みであり、諸の衆生たちをして増上慢の法より巧みに退かせることができる。一切の声聞の問いに対して、打ち負かされることがなく、諸の衆生たちを縁起に入らせることに巧みである。
第七地	欲界中天界 六欲天・(他化)自在天	DBhS 125, 14-16 (MsA 34b-35a; MsB 39a; R 63, 11-15) <i>yasyāṃ pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena vaśavartī bhavati devarājah kṛtī prabhuḥ satvānām abhisamayajñānopasaṃhāreṣv aparyantaḥ sarvaśrāvakapratyekabuddhapariṣcchāsu / kuśalaḥ / sattvān niyāmam avakrāmayitum/</i> (試訳) ここに安住する菩薩は、多くは自在天王となり、諸の衆生たちに現観の智慧をもたらすのに巧みであり一切の声聞縁覚の問いにおいて打ち負かされることがなく、諸の衆生たちを正性決定に入らせることに巧みである。

ここでも初地から順次、六波羅蜜に対応した内容が説かれていることは同様である。布施波羅蜜(四摂法中布施・愛語)、持戒波羅蜜(四摂法中愛語)、忍辱波羅蜜(四摂法中利行)、精進波羅蜜(四摂法中同事)、禪定波羅蜜(方便と般若の観察)、般若波羅蜜(方便と般若と智慧の観察)と第七地の方便波羅蜜における方便と般若と智慧の完成に至るまでのそれぞれの内容が知られる。第八地以降は次の通りである。

第八地	色界 初禪天 中 大梵天王	DBhS 146, 17-147, 2 (MsA 39b; MsB mis; R 73, 1-5) <i>yasyāṃ pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena mahābrahmā bhavati sāhasrādhipatiḥ / abhibhūr anabhibhūto 'nvarthadarśī vaśiprāptaḥ / kṛtī prabhuḥ sattvānām sarvaśrāvakapratyekabuddhabodhisattvapāramitopadeśopasaṃhāreṣv / asaṃhāryo lokadhātuvibhaktipariṣcchānirdeśeṣu /</i> (試訳) ここに安住する菩薩は、多くは一千世界の主である大梵天王となり、(他の者に) 勝り、(他の者によって) 打ち勝たれず、義利のごとく見、自在を得て、諸の衆生たちに声聞・縁覚・菩薩の波羅蜜を説示し、教授することができ、世界の差別に関する問いの提示において、打ち負かされることはない。
第九地	色界	DBhS 166, 14-16 (MsA 44a; MsB 53a; R 81, 30-33) <i>yasyāṃ pratiṣṭhito</i>

九 地	初禪天 中 大梵天 王	bodhisattvo bhūyastvena mahābrahmā bhavati / mahābalasthāmaprāpto dvisāhasrādhipatir abhibhūr anabhibhūto 'rthadarśī valiprāptaḥ / kṛtī prabhuḥ sattvānām sarvaśrāvakaḥ pratyekabuddhabodhisattvapāramitopa- deśeṣv / asaṃhāryaḥ sattvāsayaparipṛcchānirdeśaiḥ / (試訳) ここに安住す る菩薩は、多くは大梵天王となり、大きな勢力を得、二千世界の主として、 他の者に) 勝り、(他の者によって) 打ち勝たれず、義利のごとく見、自 在を得て、諸の衆生たちに声聞・縁覚・菩薩の波羅蜜を説示する力があり、 衆生の菩提に対する志向(意樂)に関する問いの提示する場合に打ち負か されることはない。
第 十 地	色界 初禪天 中 大自在 天王	DBhS 199, 4-6 (MsA 52a; MsB mis; R 95, 3-6) yasyām pratiṣṭhito bodhisattvo bhūyastvena maheśvaro bhavati devarājaḥ / kṛtī prabhuḥ sattvānām sarvaśrāvakaḥ pratyekabuddhabodhisattvapāramitopadeśeṣv / asaṃhāryo dharmadhātuvibhaktiparipṛcchānirdeśaiḥ / (試訳) ここに安住 する菩薩は、多くは大自在天王となり、諸の衆生たちに声聞・縁覚・菩薩 の波羅蜜を説示する力があり、法界の差別に関する問いの提示において打 ち負かされることはない。

第八地以降の内容も「調柔果」で見たものとほぼ同様であるが、第九地の「法の陀羅尼を説くことに通達する」を「諸の衆生たちに声聞・縁覚・菩薩の波羅蜜を説示する力があり、衆生の菩提に対する志向(意樂)に関する問いに打ち負かされることはない」と言い換えられているが、法を説く法師として弁才の力の完成(力波羅蜜)を説くことには変わりはない。

続いて初地から第十地にわたって繰り返し説かれる箇所、即ち「また布施や愛語や利行や同事によって如何なるはたらきをしようとも、すべて、仏の作意・法の作意(省略)を離れない。わたしはすべての衆生の統率者となろう(省略)乃至は一切智者の智慧の拠りどころとなるだろう」についてみてみたい¹¹。

¹¹ 初地(DBhS 29, 12-30, 1; R 22, 2-11)、第二地(DBhS 46, 10-15; R 30, 22)、第三地(DBhS 61, 6-12; R 37, 23-24)、第四地(DBhS 74, 3-8; R 41, 25)、第五地(DBhS 87, 10-15; R 47, 4)、第六地(DBhS 105, 14-106, 2; R 54, 25)、第七地(DBhS 125, 16-126, 5; R 63, 15)、第八地(DBhS 147, 3-8; R 73, 5)、第九地(DBhS 166, 16-167, 4; R 81, 33)、第十地(DBhS 199, 6-11; R 95, 6)

ここで説く「作意 (*manasikāra*)¹²」について『十地經論』では「如是諸念於事
中行已。成大恭敬除諸妄想」(Br T26, 144c28-29)といい、これらの仏、法等の作
意 (*manasikāra*) は菩薩が (前七地において) 衆生に四摂法なる行為を為し終え、
(第八地以降に) 諸仏世尊たちに対する大恭敬を成就し、諸の妄想を除くという。
またその作意に四種あるとし、即ち「仏の作意・法の作意・僧の作意」は三宝を
思惟し、「菩薩の作意」は諸菩薩たちを思惟し、「菩薩行の作意・波羅蜜の作意・
地の作意」は自他ともに行う菩薩行は次第して勝れることを思惟し、「力の作意・
無畏の作意・不共仏法の作意、乃至はあらゆる種類の勝れたものを得た一切智者
の智慧の作意」は究極なる真実であることを思惟する為であると説く¹³。そして
これらのうちの仏、法等の作意は施す者と受ける者との間に財物や菩提に分別を
生じさせず、執着させない為であり、一切の諸の菩薩行によって諸の菩薩たちが
願って大菩提に廻向する為であると述べられている¹⁴。

そして本經において、これらの作意 (思惟すること) を離れない (やめること
がない) のは菩薩が「すべての衆生の統率者となろう。最も勝れた (省略) 乃至
は一切智者の智慧の拠りどころとなるだろう」と思惟しているからであると説か
れる。その「一切智者の智慧の拠りどころ」について『十地經論』では「乃至一
切智智依止者。以大菩提道教化故」(Br T26, 145a15-16)といい、つまり大菩提の
道、即ち諸仏諸如来たちの智慧と同等のはたらきを以て諸の衆生たちの利他を願
い教化することを願う為であると理解される。

(3) 摂報という果の利益の殊勝-出家の菩薩の果-

続いて出家の (菩薩の) 果に相当する箇所は次の通りである。

用例③ DBhS 30, 2-7 (MsA 12b; MsB mis; R 22, 11-19)

ākāṅkṣaṃś ca tathārūpaṃ **vīryam** ārabhate / yathārūpeṇa vīryārambheṇa
sarvapariagrahakalatrabhogān¹ utriya tathāgataśāsane pravrajati /pravrajitaś ca sann
ekakṣaṇalavamuhūrtena samādhiśatam / ca pratilabhate² buddhaśatam / ca paśyati /
teṣāṃ cādhiṣṭhānaṃ samjānīte /lokadhātuśatam ca kampayati /kṣetraśatam cākramati
/lokadhātuśatam cāvabhāsayati /sattvaśatam ca paripācayati /kalpaśatam ca tiṣṭhati
/kalpaśatam ca pūrvāntāparāntataḥ praviśati /dharmamukhaśatam ca pravicinoti
/kāyaśatam cādarśayati /kāyaṃ kāyaṃ ca bodhisattvaśataparivāram ādarśayati /(1 R

¹² 「作意」(Śdh)、「念」(Śn, Br, Bb, Kj)

¹³ 此念略有四種。一者上念、念三寶故。二者同法念、念諸菩薩故。三者功德念、念自身他
身菩薩行自體轉勝故。四者求義念、念諸力等此是真實究竟故 (Br T26, 144c29-145a4)

¹⁴ 何者は上念、念佛等、念佛法等故。於施者受者財物及菩提不生分別不取著故。如是一切
所作業中作者不著、境界不著、作事不著、果報不著、以此一切諸行皆願迴向大菩提故 (Br
T26, 145a4-8)

sarvagṛhakalatrabhogān 2 R pratilabhate samāpadyate ca /)

（試訳）彼はまた願うや否や、そのような精進を起こし、あらゆる家も妻も財産も捨てて、如来の教えにおいて出家する。そして出家するや直ちに、一刹那即刻の間に、百の三昧を獲得して、百の諸仏を見奉る。そして彼らの加持を了知し、また百の世界を震わせ、百の（仏の）国土に入り、百の世界を照らし、百の衆生を成熟し、百の劫を止住し、前際にも後際にも百の劫に入り、百の法門を探究し、百の身体を示現し、それぞれの身体に百の菩薩の眷属を示現するような、そのような精進を起こす。

この一文は諸の衆生に対する利他なる行為を行う為に、精進を起こし如来の教えにおいて出家し、出家するや直ちに百の三昧を獲得する等の内容が説かれている。またここで注意したいのは先で見た在家の菩薩において説かれた内容に連続していると思われ、ここでいう「願い」とは直前に説かれた「わたしはすべての衆生の統率者となろう（省略）乃至は一切智者の智慧の拠りどころとなるだろう」を指すと理解される。下線を引いた箇所は初地と第二地のみ叙述され、三地以降は下線部を除くほぼ同じ内容の文章が初地から第十地まで繰り返して説かれる。冒頭にある「精進」は第五地以降は「三昧」へ変化し、「百の三昧」の百は、初地より順次、百・千・百千・百億・千億・百千億・百千億無数（以上、前七地）へと変化し、第八地以降は順次、百万の三千世界の微塵数・百万阿僧祇の仏国土の微塵数・不可説百万億無数の仏国土の微塵数（以上、第八地・九地・十地）とあり、前七地との境界の相違、つまりは無功用なる境界であることが「微塵数 (*paramāṇuraja*)」という語によって示される。これらを表にすると次の通りである。

初地 (DBhS 30, 2-7; R 22, 11-19)	vīrya	śata
第二地 (DBhS 46, 15-47, 5; R 30, 22)	vīrya	sahasra
第三地 (DBhS 61, 12-17; R 37, 23-24)	vīrya	śatasahasra
第四地 (DBhS 74, 8-13; R 41, 25)	vīrya	koṭīśata
第五地 (DBhS 87, 15-88, 3; R 47, 4)	vīrya	koṭīśahasra
第六地 (DBhS 106, 2-8; R 54, 25)	samādhi	koṭīśatasahasra
第七地 (DBhS 126, 5-13; R 63, 15)	samādhi	koṭīṇiyutaśatasahasra

第八地 (DBhS 147, 8-16; R 73, 5)	samādhi	daśatrisāhasraśatasahasraparamāṇurajaḥ
第九地 (DBhS 167, 4-14; R 81, 33)	samādhi	daśabuddhakṣetrāsamkhyeyaśatasahasraparamāṇu- rajaḥ
第十地 (DBhS 199, 11-0, 6; R 95, 6)	samādhi	daśabuddhakṣetrānabhiḥpyakoṭīniyutaśatasahasra- paramāṇurajaḥ

本經において菩薩は出家するや直ちに「百の三昧を獲得して、百の諸仏を見奉る」と説く。これについて『十地経論』では「復次出家菩薩禪定勝業、勝業有二種。一者三昧勝、所謂於一念間得百三昧。得三昧自在力故。二者三昧所作勝、謂見百佛等以得是三昧力故。於十方諸佛及佛所加諸菩薩所修習智慧故」(BrT26, 145a 17-21)といい、つまり菩薩の禪定の勝業に百の三昧の獲得とそれに伴う見仏との二種があるとし、その「百の三昧を獲得」は、三昧の自在力を得ているからであるという。その「得三昧自在力」は端的に言うと、第十地において説かれる「一切智者の殊勝なる智慧の灌頂 (*sarvajñajñānaviśeṣābhīṣeka*)」と名づけられた「菩薩の三昧 (*bodhisattva-samādhi*)」の現前 (*āmukhībhavati*) を意味すると考えられる。菩薩はその「菩薩の三昧」の現前によって「百の三昧を獲得して、百の諸仏を見奉る」と理解され、それに続く「彼らの加持を了知し、また百の世界を震わせ、百の(仏の)国土に入り、百の世界を照らし、百の衆生を成熟し、百の劫を止住し、前際にも後際にも百の劫に入り、百の法門を探究し、百の身体を示現し、それぞれの身体に百の菩薩の眷属を示現する」はその「一切智者の殊勝なる智慧の灌頂」と名づけられた「菩薩の三昧」の現前した後に説かれる内容と連動する。「彼らの加持を了知し」とは菩薩になされる諸仏諸如来たちの加持のはたらきを菩薩自身が覚り知ることである。それは第七地の終わりに菩薩が「善く思忖された観察」と名づけられた「菩薩の三昧」に入ること、第八地のはじめに「如来の加持がよく加持されている (*svadhiṣṭhitatathāgatādhiṣṭhāna*) 菩薩」となって、それ以降無功用なる境界から菩薩を行為主体とする加持を行うこと、第十地における「菩薩の三昧」の現前に至り、「菩薩の覚智 (*bodhisattva-buddhi*)」が「(諸如来たちの) 智慧に随順した覚智 (*jñānānugata-buddhi*)」となるという過程を経て、菩薩は諸仏諸如来たちの加持のはたらきを完全に了知すると理解される。そしてそれは究極なる菩薩の加持なる行為を遂行するという形で説示される。

以上、ここで菩薩は諸の衆生に対する利他なる行為を行うために精進を起こし、如来の教えにおいて出家する。出家すると直ちに「百の三昧を獲得して、百の諸仏を見奉る」と説くように、第十地における「菩薩の三昧」の現前以降に連動する内容が叙述される。それらの境界へ至り、究極的な菩薩の加持なる行為を示現するような、そのような精進を菩薩は起こすのでであると理解される。

(4) 誓願なる智慧という果の利益の殊勝

続いて「願智果」に相当する箇所が説かれ、本經の「結語部分」も各地における教説もこの一文で完結されている。それは次の通りである。

用例④ DBhS 30, 7-11 (MsA 12b; MsB mis; R 22, 21-25)¹⁵

tata uttare prañidhānabalikā bodhisattvāḥ prañidhānavaiśeṣikatayā vikurvanti / yeṣāṃ na sukarā saṃkhyā kartuṃ [/] kāyasya vā prabhāyā vā¹ varddher vā cakṣuṣo vā gocarasya vā svarasya vā caryāyā vā vyūhasya vādhiṣṭhānasya vādhimukter vābhisamkāraṇāṃ vā yāvad etāvadbhir api kalpakoṭīniyutaśatasahasrair iti / (1 R om) (試訳) これより以上、誓願の力をもつ諸の菩薩たちは、殊勝なる誓願によって変作する。それらの身体についても、光明についても、神通や眼や境界についても、音声や行為や莊嚴についても、加持や確信や所作についても、百千億無数の劫まで経ても数えることができない。

この一文は初地から第十地まで同一の文章が各地の最後に繰り返し説かれる¹⁶。「これより以上」の「これより」とは前項で述べた第十地における「菩薩の三昧」の現前以降の境界であり、菩薩の加持なる行為の示現をなしている状態を指すと理解される。従って、第十地における菩薩の加持なる行為の示現に至ってそれ以降、誓願の力をもつ諸の菩薩たちは、「(諸如来たちの) 智慧に随順した覺智 (*jñānāmugata-buddhi*)」に基づいた殊勝なる誓願 (なる加持) によって諸の衆生たちに応じてさまざまな姿形を変えて現れると説く。その「変作」はその行為主体

¹⁵ 「從此以去是諸菩薩有願力者。由勝願故。所有遊戲或身或光明或神通。或眼或境界或音聲或行。或莊嚴或勝解或加持或所作。此等乃至爾所百千俱胝那由多劫不可數」(Sdh T10, 541a25-28)、「若以菩薩殊勝願力自在示現。過於此數。百劫、千劫、百千劫、乃至百千億那由他劫不能數知 (Sn T10, 183c17-19)」、「若以願力自在勝上。菩薩願力示現過於此數。示種種神通。或身或光明或神通或眼或境界或音聲或行或莊嚴或加或信或業。是諸神通乃至無量百千萬億那由他劫不可數知 (Br T26, 145b2-6)」、「若以願力。自在示現。過於此數。百千萬億那由他劫。不可計知 (Bb T09, 547b21-23)」、「若以願力。自在示現。過於此數。若干百千萬億那由他不可計知 (Kj T10, 503a27-28)」、「菩薩由是。所建立力。入殊特願。在所變現。諸可興善。宣布惠施。乃至普通無數億劫百千劫事 (Dhr T10, 464b15-17)」

¹⁶ 初地 (DBhS 30, 7-11; R 22, 21-25)、第二地 (DBhS 47, 5-9; R 30, 22)、第三地 (DBhS 61, 17-62, 4; R 37, 23-24)、第四地 (DBhS 74, 13-17; R 41, 25)、第五地 (DBhS 88, 3-6; R 47, 4)、第六地 (DBhS 106, 8-11; R 54, 25)、第七地 (DBhS 126, 13-16; R 63, 15)、第八地 (DBhS 147, 16-148, 1; R 73, 5)、第九地 (DBhS 167, 14-17; R 81, 33)、第十地 (DBhS 200, 6-9; R 95, 6)

である菩薩の身体についても、光明、神通、眼、境界、音声、行為、莊嚴、加持、確信、所作に至るまで、百千億無数の劫まで経ても数えることができないほど、無量阿僧祇劫において無量無数に行われると説かれているといえる。これは第十地に到った菩薩の加持なる行為の様相を説示するものであり、以上から第十地における菩薩の加持なる行為、即ち衆生済度を第一義とする誓願を実現する菩薩の最終的な到達が初地から第十地までの各地の最後に繰り返し説かれていることが知られる。

結 語

(1)では菩薩の信等の善根が調えられ、誓願の力によって見仏・供養・廻向がなされることが説かれる。この中で菩薩に無数の諸仏が現れ、これらの諸如来たち等を見奉って恭敬し尊重し、礼拝し、供養する。このように菩薩が諸仏世尊たちを供養する時、諸の衆生たちの利他を願い教化する者となるという。そしてその菩薩の善根は一切智性に向けられ、菩薩の願いのままに衆生の必要性に適應するものとなると説く。第八地以降は各地それぞれの境界に対応する見仏と供養が説かれ、また前七地までの「廻向」に代わるその内容は第八地以降における無功用なる境界への転換を見ることが出来る。

(2)では菩薩は初地より第十地まで各地それぞれに対応した王位の身となって衆生を摂受し、各地における諸の衆生の利他を願い、教化することと「仏、法等の作意(*manasikāra*)」の内容が説かれる。前七地において四摂法に基づいて衆生を巧みに仏道へ向かわせる(善巧方便)ことが説かれ、第八地以降は色界に至った菩薩が無功用なる境界において各地における菩薩の行証の示現が説かれる。また菩薩が「作意」から離れないのは諸仏諸如来たちの智慧と同等のはたらきを以て諸の衆生たちの利他を願い教化することを願う為であると理解される。

(3)では菩薩は諸の衆生に対する利他なる行為を行う為に精進を起こし如来の教えにおいて出家する等の内容が説かれる。出家すると直ちに「百の三昧を獲得して、百の諸仏を見奉る」と説かれ、第十地における「菩薩の三昧」の現前以降に連動する内容が叙述される。「百の三昧」の百は、初地より順次、百・千・百千・百億・千億・百千億・百千億無数(以上、前七地)へと変化し、第八地以降は順次、百万の三千世界の微塵数・百万阿僧祇の仏国土の微塵数・不可説百万億

無数の仏国土の微塵数（以上、第八地・九地・十地）とあり、前七地との境界の相違が「微塵数(*paramāṇuraja*)」という語によって示されている。そしてそれらの境界へ至り究極的には菩薩の加持なる行為を示現するような精進を菩薩は起こすのであると理解される。

(4) では前項で述べた第十地における「菩薩の三昧」の現前以降の境界において菩薩の加持なる行為の示現に至って、誓願の力をもつ諸の菩薩たちは「(諸如来たちの) 智慧に随順した覚智(*jñānānugata-buddhi*)」に基づいた殊勝なる誓願(なる加持)によって、諸の衆生たちに応してさまざまな姿形を変えて現れると説く。この一文は第十地に到った菩薩の加持なる行為の様相を説示するものであるが、初地から第十地までの各地の最後に繰り返し説かれ、ここに諸の衆生たちに対する利他なる願いが繰り返し説示されることが知られる。そしてそれは十の菩薩地において衆生済度を第一義とする誓願を実現する菩薩の最終的な到達であり、即ち諸仏世尊たちの智慧地なる十の菩薩地において、衆生済度の菩提心を発し、決定された誓願をもつ菩薩に諸仏の智慧が生成することを示現するものである。この最後の一文の繰り返しは、十の菩薩地の階梯を前七地と八地以降の境界の相違に従って説きつつも、十の菩薩地全体が仏の自内証の境界であり、三世にわたって諸仏世尊たちに説かれているものであることを示すものであると思われる。

以上、この「結語部分」において十の菩薩地の階梯全体が簡潔に説かれると共に、本経の説く十地の趣意と構造が示されていると理解される。

略号

MsA,B Two Sanskrit Manuscripts of the *Daśabhūmikasūtra* preserved at The National Archives, Kathmandu edited by Kazunobu Matsuda The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco The Toyo Bunko 1996.

DBhS 梵文大方廣佛華嚴經十地品 *Daśabhūmīśvaro nāma mahāyāna sūtram* (Tokyo, 1836)

R Rahder ed., *Daśabhūmika-sūtram et bodhisattvabhūmi* (Louvain, 1926)

Dhr Dharmarakṣa (竺法護), A. D. 297 訳出『漸備一切智徳経』(10. 458af.)

Kj kumārajīva (鳩摩羅什), A. D. 402-412 訳出『十住経』訳出(10. 497cf.)

Bb Buddhābhadrā (佛駄跋陀羅), A. D. 418-420 『六十華嚴』訳出(9. 542af.)

Br Bodhiruci (菩提流支), A. D. 508-511 『十地経論』訳出(26. 123af.)

- Śn Śikṣānanda (實叉難陀), A. D. 695-699 『八十華嚴』 訳出 (10. 178bf.)
 Śdh Śīladharma (尸羅達摩), A. D. 753-790 『仏説十地經』 訳出 (10. 535af.)

参考文献

- 荒牧(1974) 荒牧典俊訳 『大乘仏典』(8) 十地經 中央公論社
 平賀(2007) 平賀由美子 「『十地經』序章における *anubhāva* と *adhiṣṭhāna* について」
 『密教文化』218, pp. 139
 (2008) 「『十地經』第八地における *adhiṣṭhāna* について」『密教文化』220, pp. 114-121
 (2009) 「『十地經』における *adhiṣṭhāna* について-第八地を中心として-」
 『印仏研究』57-2
 (2010) 「『十地經』第十地における *adhiṣṭhāna* の特徴的様相」『密教文化』225
 (2011) 「『十地經』における *adhiṣṭhāna* (加持) の諸相-第十地を中心として-」
 『印仏研究』59-2
 石井(1935) 石井教道訳 (長尾雅人・早島理校訂) 『国訳一切經 釈經論部 六』
 大東出版社
 伊藤(1988) 伊藤瑞叡 『華嚴菩薩道の基礎的研究』平楽寺書店
 川田(1975) 川田熊太郎 「佛陀華嚴-華嚴經の考察-」『華嚴思想』法蔵館
 龍山(1982) 龍山章真 『梵文和訳 十地經』国書刊行会

<キーワード> 十地經、*adhiṣṭhāna*、誓願、菩薩地